## 日本産業教育学会 関東地区部会

# 第38回 エルゴナジー研究会報告集

## 2013年2月15日(土)

## 於 職業能力開発総合大学校(小平)

## 研究会プログラム

#### テーマ

柳田 雅明 「国際バカロレア・モデルによる職業 - キャリア教育の可能性 - イギリスを手がかりに-」

佐藤 康則 職業能力の獲得過程に関する考察 1

#### 職業能力の獲得過程に関する考察 -IT プロジェクトマネージャの成長を例に-

#### 佐藤康則\*1

#### 1. 背景

職業能力の獲得については短期間に効果的な方法に関する議論が多く、長期に渡る成長の過程として捉えた研究は少ない。また情報通信分野においては、高度人材育成のニーズが高いにも関わらずその能力獲得過程の研究が不十分である。そこで、本研究は具体的な事例としてITプロジェクトマネージャを取り上げ、職業能力の獲得過程をより深く考察するために、その構造と要素を明らかにしようとする試みについて述べる。

#### 2. 研究の仮説

職業能力の獲得過程を明らかにするためには、これまでの研究の成果や枠組みを使い「可 視可」するにはどうしたらよいかという観点 から以下の3点を仮説として設定した。

第一はITのプロジェクトマネージャ(以下PM)の学びは正統的周辺参加論で説明できる。 従って「成長とはアイデンティティの形成過程」である。第二は、日本の伝統芸道における学びや成長に重要な役割を担う「形」がPMにも存在する。第三は、専門能力の獲得過程を、日本の長い歴史を持つ伝統芸道における「守・破・離」論を師弟関係論の観点から成長の枠組みと捉え、これを補助線として使うことにより「可視化」できる。

以上の仮説を検討することにより、職業能力の獲得過程を「見える化」し、より本質的な要素を明らかにすることができると考えた。

#### 3. 方法と結果

研究の方法は、個別具体的な事例を調査し、 その背後にある構造や要素を明らかにするの に適したグランデット・セオリー・アプロー チ(GTA)を使った。

研究の対象は、典型的な PM の経験者 4名に対して聞き取り調査を行った。聞き取りの観点は、成長過程を振り返り成長に必要な要素は何か、また指導者としての立場から指導される人との間にどのような相互作用が存在するのかを中心に行った。

#### 4. 結果と考察

聞き取りの結果を分析した結果以下の3点

が明らかになった。

- 1)「守・破」の段階において、指導者と被指 導者の間には「介入する、見守る、任せる」 という構造的な相互作用が見られた。
- 2)「守から破に向かう」段階において、「動機付け(指導者:動機づける、被指導者:動機づく)」ことを経験的に重視している。その結果、被指導者に「役割を遂行するための責任感」が生じている。
- 3)「破から離に向かう」段階では、もはや形式的な指導者と被指導者という関係は存在せず、PMの内面へと移行して行く。つまり自己の行為を客観視することができるメタ認知的な能力を獲得していると考えられる。

#### 5. 結論

仮説として設定した第一は、PMが「守から破」に向かう段階で、職業能力を獲得して行くことが周囲の関係者から認められ、その能力と立場を確認できていることから「アイデンティの形成」が実践されていた。第二の仮説については「形」は存在する。しかしての統芸道における「形」のようにお手本としての形ではなく、「臨機応変に対応できる心しての形である。第三の仮説についする」としての形である。第三の仮説についするとしての形である。第三の仮説についするとしての形である。第三の仮説についするというにと考える。但し「離」の段階の検証までは至らず、「指導者と被指導者が内化する」という仮説を導く段階に留まり、検証はできていない。

#### 6. 今後の課題

個別具体的な事例の掘り下げから、背後の 構造を明らかにし、より深く職業能力の獲得 過程と本質的な要素を抽出するためには有効 である。このとから、今回に事例では「離」 の段階にある対象者を分析すること、また対 人支援等の他の分野の専門家を調査する必要 がある。また伝統芸道の観点を更なる補助線 として、獲得すべき能力の「本質」とは何か、 専門領域によって違いがあるのかといった観 点から調査分析することが重要である。